

# あるむぜお108

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 108

2014年6月20日



多摩川ジオラマのミニチュア模型

## 目次

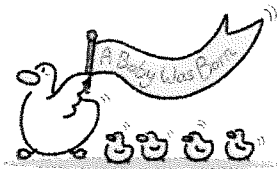
- 1-2 リニューアル速報!
  - ①都市と緑と
- 3 最近の発掘調査  
府中駅南口再開発第一地区の発掘調査速報
- 4-5 ノート 府中における養蚕と神仏
- 6 多摩川あさかな考
  - ①オイカフ
- 7 平成 25 年度資料受入れ、利用状況報告、  
新刊案内
- 8 連載 天文・宇宙の最新動向
  - ⑤はやぶさからはやぶさ2へ (その1)

## リニューアル速報!

今年の10月4日に、本館2階常設展示室の「中世」「近世」「近現代」および「自然」部門がリニューアルオープンします。本シリーズでは、リニューアルの意図や進捗<sup>しんちよく</sup>状況などを紹介します。

## ①都市と緑と

府中に残る豊かな自然を具体的に表すには、リアルなジオラマ展示が有効でしょう。写真は自然コーナーに展示予定の、多摩川ジオラマの完成イメージを検証するために製作された、ミニチュア模型です。



## リニューアル速報！ ①都市と緑と

常設展示室のリニューアル工事は、夏に向けていよいよ佳境に入りますが、一新される展示の内、今回は府中の自然をテーマにしたコーナーについての概要と進捗状況をお話ししましょう。

1970年(昭和45)から1985年まで続いた府中の自然調査データを基に、市内に生息する植物・昆虫・野鳥の紹介を軸とした旧常設展示が撤去されてから、早いものでもう7年が過ぎました。この旧展示では、純粋に府中の植物・昆虫・野鳥を紹介する内容で、それぞれの標本をグループ別に列挙した分類方式をとっていました。これは、生物の基本的な展示方法で、いわゆる図鑑的に生物群を仕分けしながら見せる方法です。確かに自然調査報告に基づいた各種生物が展示され、府中では多くの動植物が確認されているという事実と共に、自然の豊富さが伝えられていたと思います。ですが、長年に亘る博物館活動の中で、やはり自然観察に重きを置くべきだという思いは強く、機会があれば分類展示から生態展示にシフトチェンジする必要性を感じていました。本来生物は多種グループが入り組んだ形で自然界の各環境を構成しているものです。どんな場所にどういう風に見られるのかが示されてこそ、実際の自然観察に直結するはずなのです。

そこでリニューアル構想では、府中の主たる自然環境を表現し、そこに見られる植物や昆虫、野鳥を同じ土俵に入れて紹介することとしました。府中の主たる環境とは、多摩川・浅間山・段丘崖の3つに市街地を加えた4つのブロックです。そこで、展示室の3面の壁を背景にこれらのジオラマを作り、環境そのものを疑似的に捉えつつ、そこに標本を加えることとしました。さらにここに季節的要素を加味し、段丘では秋から冬、多摩川では冬、浅間山では最も生物が活気づく春から夏にかけてを選択しました。出来るだけ本物の自然に近い形の展示を見た上で、それを機に実際の多摩川や浅間山に足を運んでもらうことを意図しています。

現段階では、そのジオラマ製作が進んでいます。段丘や浅間山を飾るメインの樹木は実物を使用し、

樹木の葉や林床の植物はレプリカを製作します。実物の樹木と草本類のレプリカを組み合わせつつ、その中に野鳥の剥製や昆虫標本を最終的に置いていきます。まるで自然の一部を切り取って来たかのような迫力ある景観を再現しようと言うわけです。2年かけて型どりのサンプルとなる植物を採集し、展示する樹木の調達を行いました。生木はすべて除虫のため燻蒸もしました。現在は工場で植物のレプリカを製作中であり、かつ舞台となるそれぞれ異なる環境の土台製作に取り掛かっている所です。実際に展示を見る際には、高さあり、奥行きありのリアルなジオラマ空間を体感できることでしょう。



丁寧に色づけされた葉のレプリカ

自然コーナーのもう一つの目玉は、府中市に見られる緑豊かな場所を巨大な地図上で探しながら、情報を得ることができるメディアテーブル(デジタル機器)です。画面に表示される地図に触れながら検索する体験型の装置です。これには多摩川の一部をクローズアップした画面も入っていて、こちらにも触れることによって様々な生物たちの行動などを楽しめる仕掛けになっています。今はプログラムに組み込む内容がほぼ決まり、その素材集めに入る段階です。

都市・府中に残る豊富な自然環境と、そこに登場する生き物の一端をひとまず博物館でイメージした後は、積極的に野外へと出掛けてもらえたらと、今から期待しています。(中村武史)

最近の発掘調査

# 府中駅南口再開発

# 第一地区の発掘調査速報

宮町二丁目 府中市ふるさと文化財課 野田 憲一郎



府中駅南口再開発第一地区の発掘調査状況

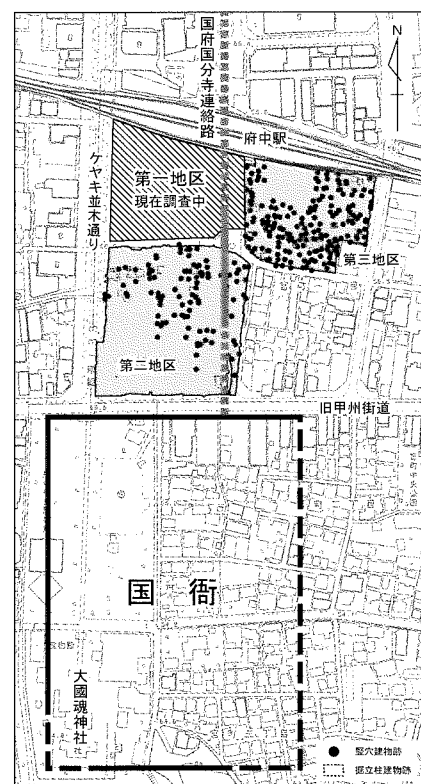
昨年11月から府中駅南口再開発第一地区の大規模な発掘調査が本格的に始まり、多くの遺構・遺物が発見されています。今回は、その最新の発掘成果をご紹介します。

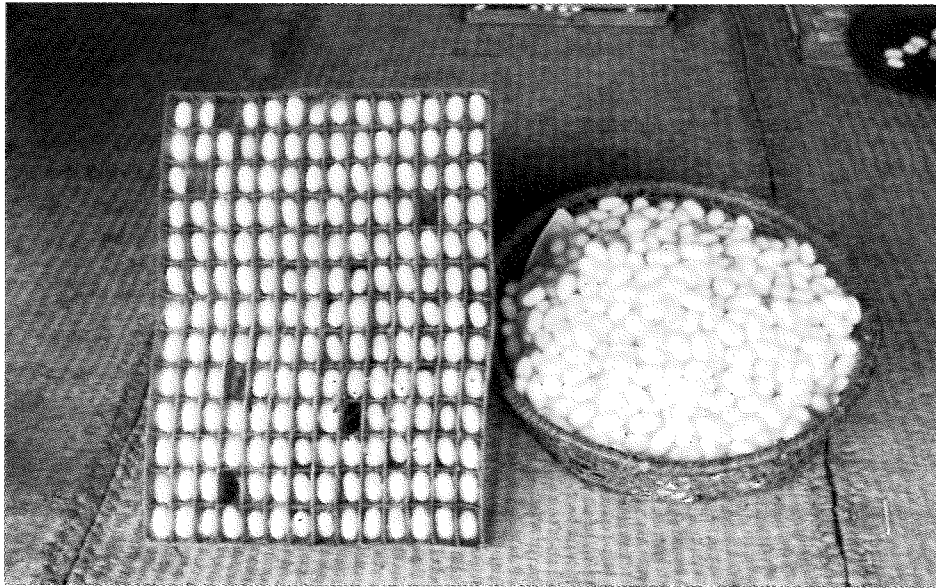
府中駅南口再開発第一地区は、第二地区（フォーリス・伊勢丹）と第三地区（くるる）に続く最後の大規模開発事業で、調査範囲は約7,759㎡におよびます。この一帯は武蔵国衙に近く、奈良・平安時代の遺跡が濃密な地域で、すでに第二・三地区の発掘調査では合計で308棟もの竪穴建物跡が確認されています。今回の第一地区においても、全体の約6割の調査が終了した時点で100棟を超える竪穴建物跡が発見されており、武蔵国府のマチのなかで最も建物が密集する地域であることが分かります。竪穴建物跡の中には、火災で屋根の木材が焼け落ちたものや、南壁にカマドが取り付けられたものなど、希少な事例も発見されています。これらの竪穴建物跡からは、土師器・須恵器などの土器類のほか、鍛冶炉に取り付ける送风管など小鍛冶に使用される道具や、鉄鎌などの農具、腰帯の飾りなど役人の所持品も出土しています。国衙の機能を支える役人や工人が居住していたと考えられます。

また、当調査地区では、国衙の北面から真北方向に延びる道路跡も見つかっています。この道路跡は、国府と国分寺を結ぶ連絡路と想定されており、国府のマチを構成する主要な道路です。

出土遺物のなかでは、竪穴建物跡から出土した文字瓦が注目されます。丸瓦に「武蔵国□□」とへう書きされていました。「武蔵国」以下の文字については現在判読中ですが、武蔵国衙に供給する瓦を献上したことを示すものか、または、文書の文字を練習したものではないかと考えられます。

今回は、第一地区の前半の発掘調査成果をご紹介しましたが、この後も夏にかけて調査が続きます。この地域は、国衙の運営に関わる人々の集住する重要な地域と考えられますので、新たな発見が期待されます。





マブシに入った蚕の繭（左）およびそれを収穫したザル（右）

#### ▼ 郷土の森博物館と養蚕

家の中で蚕を育て繭にし、それを生糸、絹の材料として出荷する養蚕はかつて盛んに行われていました。江戸時代以前にもあったようですが、明治維新以降、海外から当時の先進的な製糸技術を導入するようになったことから、養蚕、そして繭を生糸にする製糸業が盛んになりました。本年6月に世界遺産に登録されることになった群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」は養蚕農家から製糸場までを含む、日本の養蚕史を語る代表的な文化財といえるでしょう。

府中市域でも、江戸時代から養蚕を行っていた家もあるようですが、製糸、養蚕技術がさらに発達した大正時代頃から、ほとんどの農家がはじめたようです。そしてそれは昭和初期頃まで盛んに行われ、現金収入を得る身近な手段でした。郷土の森博物館内に移築復元されたかやぶき民家である旧越智家住宅、旧河内家住宅のいずれも、かつては稲作や畑作を生業とする傍ら養蚕を行っていたといえます。

また、郷土の森博物館で収蔵する、市内から寄贈を受けた資料の中にも、蚕を飼うために必要な蚕の卵（「蚕の種」として売られていました）、餌になる桑の葉、桑をきざむための包丁、

蚕を置く台、マブシと呼ばれる繭をつくらせる場所等、養蚕に関係するものがたくさんあります。本年3月にリニューアル工事がはじまるまで25年以上展示されてきた、本館常設展示室の民俗を紹介するコーナーにおいても、農業、多摩川での漁、おかしの道具と並んで広いスペースをつかって、府中の養蚕を紹介していました。

しかしながら、現在府中で養蚕を行っている農家はありません。当然市内に桑の木はあっても、桑畑はありません。それどころか、養蚕がどういったものかを知っている人が減ってきています。

#### ▼ 養蚕に対する信仰

養蚕は用具を揃え、手伝いを雇うなど多くの設備投資を必要とするため、出費もかさみました。現金収入を得る手段ではあっても、失敗するリスクを抱えていたようです。また、卵から孵化した蚕が桑の葉を順調に食べ、脱皮を繰り返し、良い繭になることが望まれますが、ネズミに食べられたり、病気になることもあります。

そんな不安をはらうため、小正月や養蚕作業の合間に、繭の形をしたマユダマ団子を米の粉でつくり木の枝に挿して飾り、繭の豊作を願ったり、稲荷様の祠に繭を奉納したりしていまし

た。府中市域にも上記のような例は見られます。その他にも武蔵野市の井之頭弁天（蛇の化身）の絵馬をいただいてきて、蚕の天敵であるネズミ除けにする家もあったといひます。

また、養蚕や蚕を守護する神仏は日本全国に数多く残されています。なかでも蚕影神社（茨城県つくば市が本拠とされ、蚕影山大権現、単に「コカゲサン」とも呼ばれる）が有名です。

養蚕農家もコカゲサンのお札や御影（絵姿）をかかげ、「蚕がよく育つように」と願いをこめていたことが知られています。農協や養蚕組合、養蚕業者などがお札を配っていた場所もあります。多摩地域でも立川市砂川の阿豆佐味天神社境内や日野市本町の八坂神社境内、同市南平の熊野神社境内に蚕影神社がまつられています。府中でも白馬に乗った女神像（コカゲサン）の掛軸を持つ家があったといひます。

しかしながら、郷土の森博物館には養蚕の道具類を多く収蔵していても、養蚕の信仰にまつわる資料は多くありません。大國魂神社や村の鎮守に祈願していたのかもしれませんが、養蚕に特化したご利益を持つ寺社のお札やお守りをいただくことは府中市域では少なかったのではないのでしょうか。

#### ▼府中で発見 馬鳴菩薩の札

ところが最近、市内のあるお宅から多種のお札を寄贈していただいたところ、そのうちの一枚に「蚕養擁護 馬鳴菩薩」と刷られたものがありました。馬にまたがり、6本の手で生糸、繭を量る秤、桑らしき葉などを持っている仏様の姿です。発行寺院名が記されておらず、しかも一枚のみです。いつ、どこで発行されたものかも伝えられていませんでした。

馬鳴菩薩は、養蚕にまつわる仏様として知られ、日本各地でまつられています。多摩地域で

も各所にあるようですが、現在の府中市内でまつている寺院はありません。同じものを市内で見ることないため、このお札は市域外の寺院からいただいてきた可能性があります。

また、このお札は、現在の中央区にあったという釣船神社（現在移転）や「府中町正観音」と記された観音像御影（市内本町に1926年まで存在した寺院・蓮乗寺のものか）といった、現在では発行されておらず、なおかつ江戸時代まで遡らないと思われるお札とセットで箱に収納されていました。

多摩地域で養蚕のご利益を持つ寺社は、江戸時代以前の建立と伝えるものが多いようです。府中市域でそんな寺社が存在せず、お札やお守り、掛軸が少ないのは、大正以降養蚕が盛んになったという事情や、養蚕組合や業者といった、

お札類を配布する人々の活動が少なかったことを物語っているのでしょうか。今回見つかった馬鳴菩薩のお札が、府中市域の養蚕史に一石を投じる存在であるか？の判断は、今後の検証成果を待ちたいと思ひます。

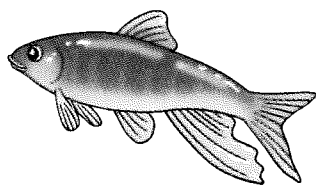
#### ▼府中養蚕史の把握にむけて

養蚕を記憶されている方は市内にまだおられます。しかし若い世代には当然そんな記憶はありません。仮にあったとしても、桑や残された道具類に関するものや、当時の様子を経験者から伝え聞いたことがほとんどでしょう。まして信仰などに関しては不明な点だらけです。

歴史が浅い割に不明な点が多い府中の養蚕について把握するには、記憶や伝承が失われてしまう前に多角的な視点からの調査が必要です。そのため、養蚕が府中の人々にとってどのような存在であったのか？という問いを今後も発し、調べ続けていきたいと思ひています。



「蚕養擁護 馬鳴菩薩」と刷られたお札



## ① オイカワ

今年の春から博物館エントランスホールに大きな水槽を設置しました。昨年夏に開催した特別展「多摩川にアユが帰ってきた！」で好評だった“多摩川水族館”を、恒常的に楽しんでもらえるよう、コンパクトに再現したものです。府中の南縁を流れる中流域の多摩川に生息する魚を多種紹介するスポットとして、実験的飼育も兼ねて公開しています。これを機に多摩川の環境を身近に感じてもらうことが出来ればと期待しています。

本シリーズでは、多摩川の代表的な魚を紹介しつつ、少しだけ環境の話を加えながら考察してみようと思います。

この季節、多摩川はアユ解禁で賑わいますが、同時期にアユ以外にも目立つ魚がいます。ちょうど春から夏にかけては繁殖期に入る時でもあり、オスの体が光沢のある綺麗な赤や青緑の婚姻色を呈しているこの魚・・・オイカワです。

通常は銀白色の平たく細長い体で、全長は15cm程度、オスの方が大きくなります。卵は浅い平瀬の砂利に数回産みつけられ、川岸や橋の上から注意していると、オスとメスが隣り合って底砂を巻き上げている様子を観察することができます。産卵行動に集中するあまり、サギ類に捕食されてしまうこともあるようです。底石の付着藻類や水生昆虫などを餌にする雑食性の魚で、朝や夕方には水面近くにやって来て波紋を作りながら、流下・落下してくる獲物を捕らえます。

本来は、北陸・関東より西の地域、四国の瀬戸内側、九州北部に自然分布する魚ですが、東北や四国の太平洋側などにも移入されています。多摩川でも最初から生息していた種ではなく、放流するために持ち込んだアユなどに混じってきたものと考えられています。すっかり代表種となったオイカワですが、多摩川中流域

に多く見られるのは、頻繁に行われる河川改修が要因でしょう。河川改修が進むと河道は直線化し、この結果、河川の屈曲部にあった深くて大きな淵が姿を消します。そして川は一律に浅瀬の多い構造となってしまいます。オイカワは、もともと平瀬を好んで活動する習性があるので、適当な生息環境の拡大が個体数を増やす結果となったのです。

多摩川はもちろん、すっかり全国の川で大衆魚としての地位を築いたオイカワ、属名のZaccoは「雑魚」に由来したものとも言われます。また多くの地方名（方言に相当する呼び名）があり、東京23区内ではヤマベが一般的ですが、多摩地域では、バカツパヤ、オコゼ、ガンガラなどと呼ばれています。また、オイカワ同様分布域の広いカフムツや、オイカワとともに多摩川の代表種であるウグイを含めて、ハヤと総称している地域もあり、これが訛ったのが、関西ではハエと言います。標準和名のオイカワは、琵琶湖沿岸域で産卵期にメスを追うオスの呼び名が正式名称となったものです。琵琶湖産のアユが多摩川に放流されていることを考えると、まさに多摩川のオイカワもこの辺にルーツがあるような気がします。

“多摩川水族館”では通年観察を目指して本種を飼育しています。オイカワは水槽から飛び出す傾向があり、高温は苦手な方だと言われますが、水中の酸素供給を十分にすれば人工の餌にも慣れ、他の魚との混泳も可能です。但し、成長するにつれ驚いた際に水槽の壁にぶつかって怪我をすることもあるので、横幅120cmの大型水槽内で他種と一緒に飼育しています。



オイカワも泳ぐエントランスホールの常設水槽

平成25年度  
寄贈・寄託資料一覧

平成25年度  
利用状況

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	江草 陽子	続縄文土器	考古	1点	寄贈
2	細谷 政秀	住吉町採集縄文土器片 他	考古	2点	寄贈
3	平岡 優子	東京府三多摩全図	歴史	1点	寄贈
4	臼井義太郎	小金井組半纏	歴史	2点	寄贈
5	平岡 優子	絵葉書帳 他	歴史	3点	寄贈
6	福島 信一	郷土概観	歴史	1点	寄贈
7	篤 名	米軍投下ピラ 他	歴史	57点	寄贈
8	村野儀右衛門	徳利・ゴミ箱	民俗	5点	寄贈
9	水谷 勝久	こたつ・ちゃぶ台	民俗	2点	寄贈
10	大津成一郎	五月人形	民俗	1点	寄贈
11	澤井 照征	柄鏡	民俗	2点	寄贈
12	鈴木 真弓	半纏	民俗	3点	寄贈
13	高橋 昇二	幕	民俗	1点	寄贈
14	宮崎イク子	花嫁衣装・写真	民俗	一式	寄贈
15	平岡 優子	記念メダル	民俗	3点	寄贈
16	福島 信一	銭箱・算盤・下駄修理道具	民俗	17点	寄贈
17	石川 裕三	鏡台・恵比須軸	民俗	9点	寄贈
18	内藤 顕輔	出征履歴入り日の丸旗・ 写真帳	民俗	3点	寄贈
19	鈴木 真弓	一小100年記念文鎮	教育	1点	寄贈
20	星合 純子	古幡光男氏連関連資料	大賀	一式	寄贈

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数310日	大人	137,014	5,704	46,902	189,620
	子供	26,648	18,685	52,881	98,214
	小計	163,662	24,389	99,783	287,834
上記のうち プログラム観覧者 投影日数296日	大人	28,598	2,135	4,457	35,190
	子供	15,421	10,373	5,558	31,352
	小計	44,019	12,508	10,015	66,542

＊新刊案内＊

☼ 『府中市郷土の森博物館紀要』27号 400円

学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・大國魂神社宮司家の伝世かわらけ

[小林謙一・小川望・深澤靖幸]

- ・武蔵台遺跡出土漆紙文書の再調査 [廣瀬真理子]

- ・国学者依田貞鎮（徧無為）による聖徳太子撰「未然本紀」の註解 [野田政和]

- ・嘉永七年府中番場宿百姓出入り訴状について

[林 巖]

- ・「御本社太鼓講中」の現状と歴史

—大國魂神社くらやみ祭を支える人々—

[下村盛章・飯島芳則・小野一之]

☼ 『府中市内家分け古文書目録16

本宿小野宮 内藤治右衛門家文書目録（2）』

400円

現在の住吉町の旧家、内藤治右衛門家から寄贈された古文書の目録を、検索が便利なCD版で刊行しました。

※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて発売中です。

★「あるむぜお」は定期購読できます!★

「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。4回分の送料328円（切手でも可）を添えて、受付カウンターでお申込みください。

常設展示室リニューアルオープンのお知らせ

本館2階常設展示室が、10月4日にリニューアルオープンします。生まれ変わる常設展示室に、ご期待ください。



連載

# 天文・宇宙の最新動向



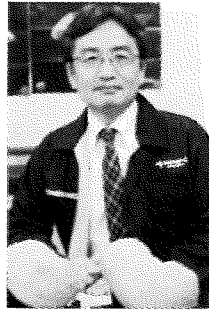
## ⑤はやぶさからはやぶさ2へ (その1)

インタビュー：本間隆幸

今回から3回にわたり、はやぶさ2のミッションマネージャーである吉川真さんにお話をお伺いします。

### Q.はやぶさの打上げまではどうでしたか？

私が宇宙科学研究所（現JAXA）に異動してきた初日の1998年4月1日が、来所中のJPL（NASAジェット推進研究所）の軌道グループメンバーとのMUSES-C（はやぶさ）軌道会議でした。



目指す小惑星を何度か変更したり、はやぶさ製作の過程でいろいろ問題もありましたが、2003年5月9日、無事打ち上げられ、予定通りの軌道に投入されました。

### Q.位置や軌道はどのように知りましたか？

はやぶさは、最初の1年は地球とほぼ同じ軌道を一周し、2004年5月19日、地球スイングバイによって地球の軌道から離れ、約2年4か月後の2005年9月にイトカワに到着しました。

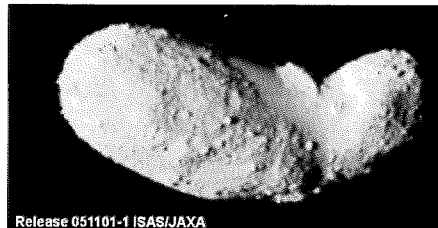
その間のはやぶさの位置と速度は、地上の追跡局とはやぶさとの電波の送受信により知ることができました。電波が戻ってくるまでの時間からはやぶさまでの距離が、送信と受信の電波の周波数のズレから地球とはやぶさの相対的な速度がわかります。そのデータを時々刻々モニターして、軌道力学の計算ではやぶさの軌道を割り出します。ただし、1億km離れると約百kmの誤差があり、このままでは500mしかない小惑星イトカワへの到着は難しいので、はやぶさがカメラでイトカワを捉えてからは、光学航法に切り替えました。背景の星からイトカワの方向がわかるので、電波のデータと合わせてはやぶさの位置をより正確にわかりました。この結果、はやぶさはイトカワ上空20kmのところに着することができました。

### Q.航行は順調でしたか？

打ち上げの約3週間後、4つあるイオンエンジンの試運転を開始したところ、ひとつの調子が悪いと分かりました。このため、残りの3つのイオンエンジンで航行しなければならなくなりましたが、特に問題なく順調に航行することができました。

### Q.イトカワはどのような様子でしたか？

表面の様子が見えてきて驚いたことは、クレーターではなくてゴツゴツした岩で覆われていたことです。これには世界中の研究者がびっくりしました。当時、接近撮影されていた、ガズラ・エロス・マチルダなど、どの小惑星も表面がクレーターで覆われていました。このため、イトカワも当然そうだと誰もが思い込んでいたのですが、実際にはクレーターが全然見えず石ころだらけでした。ある意味はやぶさの一番大きな発見と言ってもいいと思っています。



Release 051101-1 ISAS/JAXA

### Q.イトカワの調査でわかったことは何ですか？

はやぶさが撮った1500枚もの写真から、表面の様子を詳しく調べました。これによりイトカワの形や体積が明らかになりました。さらに、イトカワの引力に引っ張られたはやぶさの動きから重力がわかり、質量と密度を計算することができました。また、近赤外線とX線の観測から、表面の鉱物が予想通り普通コンドライトという隕石と同じ性質・元素組成だということがわかり、イトカワが普通コンドライトの母天体の一つであることが確認されました。

吉川 真 Yoshikawa Makoto JAXA准教授

略歴：1989年東京大学大学院修士博士 現情報通信研究機構を経て1998年より現職 太陽系天体や人工天体の軌道が研究対象

※あるむせお イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意